

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

小野修著

『政治における理性と情念』

（世界思想社 四六版
二二六頁 一、六〇〇円）

著者について一般的に近頃もつとも知られてゐることは、日本におけるカンボジア難民救援会の指導的メンバーとしてご夫人と共に国内外において（彼は現地においても）活動されていることであろう。

しかし、その実践的でヒューマンな平和の言動は、彼の希望と哲学をできる限り客観化したもの、それゆえ科学化されたものとして広く説得性をもっている。

われわれはあまりにも永い間、ある種の

気負った平和思想にひたっていた。この国には静かで持続性をもつ平和の政治哲学は育ちにくいのであろうか。このことに著者は理性と情念をもつて対応し、説得性の高い一書を編んでくれた。

さて、本書は二部に分かれ、第1部では科学と哲学についての著者の基本姿勢を示している。すなわち哲学上の認識論が現代の状況から強く経験科学の影響を取り入れていることを評価する。これは著者がその大学院時代からイギリス経験論に研究の手をそめていたことにもよろう。そのためか本書の各章には著者苦心のユニークな標題をみる。1、思考の領域（科学と宗教、科学の従僕か）4、真理と信念（性格と思考傾向、心情と利益、など）とくに右の第1部では経験科学的認識に相關する歴史理念的的政治認識とを綜合させた「好ましくかつ安定的」なシステムを意欲的に求め、「世界連邦政府」を真理実現の方程式に見出している。

二

第2部においても哲人たちの歴史的、政治的適応の跡をたどりながら、7、信仰と

理性、8、理性と信仰、11、予見性と自由（行動の予測性について、近代化のパラダイム）、12、法則と意志（カントの場合）といった十三章をあげている。なかでも著者はホッブスを通し幾何学の方法をもつて新しい視角（パラダイム）を体系化する。それは今までの権力構造の分析と批判が制度や人間を本質的に否定する哲学というところで類語反復に落ち入っていることへの反省でもある。

地球共同体を幸福にしてゆく政治学は今や相当な理性と情念をもつて再構築されつつある。本書はその意味で、国家と市民の歴史に新しい政治構造の「進展図式」を描く人々に希望をもたせてくれる。

武邦保（女子大学教授）

小林良彰著

『なぜ欧米は落日か——』

日本は何を学ぶ』

（ソーテック社 B6版
二二四頁 一、〇〇〇円）

著者の小林良彰氏は、フランス革命と明治維新の同一性を主張してユニークな史論

を展開する歴史学者として知られている。

私はこの分野にはまったく門外漢であるから、小林氏の専門領域の研究をコメントする能力はない。だが同氏が、余技——といえるかどうか、歴史家の目を通して欧米諸国の現実の姿を縦横に描いたのが本書であり、私もかつてヨーロッパで学び、彼地に知己・友人もいる関係で、この本を興味深く読ませてもらった。

小林氏は、本書のテーマを「日本のはるか先を行っていた欧米諸国が、なぜうまくいかなかったのか」という点に置き、「イギリス病から欧米病、先進国病へと拡大した病根を解明すること」が目的であるという。著者の意図するところがこのあたりにあるためか、本書のどのページを開いてもこれでもか、これでもかとはかりに欧米諸国のマイナスイメージが語られていて、小気味が良い。試みに、その中からひとつだけ取り出してみる。

『パリの郵便局で、女性局員が男性の客に対してヒステリーを起こし、荷物を秤りにかけながら秤りの分銅を力まかせにたたきつけた。金属と金属であるから、

すさまじい音がした。それでも、フランスの男性は顔色ひとつ変えず、静かにお金をを出している。それに対して、女性の側がおつりを力いっぱいたたきつけてにらんでいるが、男のほうは愛想よくにこりと笑って、「メルシマダム」といつて立ち去った」(六四ページ)

この種の話は、もっぱら著者の小林氏が現地で見聞し体験したものばかりなので、それらの事実を並べただけでも十分に西洋文明の批判になっただろう。そこへ小林氏独特の「目」が加わっているため、強い説得力をもって読者に迫ってくる。ぜひ一読をすすめたい。

ついでに無いものねだりをする、著者の目が欧米の現実を横へ横へと追うだけでなく、歴史家としての目でも深く掘り下げた分析をすれば、さらに奥行きのある深い西洋文明批判となったのではないだろうか。もっとも小林氏の其の意図は、欧米病の病根を解明したそのカルテを、放っておけばかかるかも知れない日本病の予防に役立てようというところにあるのだから、むしろ同氏の次の本(ソーテック社刊『日本

は没落するかー欧米とどうちがうー』を刮目して待つべきであろう。

杉江雅彦(大学商学部教授)

安岡重明編

『日本財閥経営史 三井財閥』

(日本経済新聞社刊 A5判)
(三八四頁 三、八〇〇円)

従来、日本財閥史の研究は独占資本研究や帝国主義研究の枠にはめこまれてきた。これに対して経営史の面から見直し、個別財閥のもつ個性を抽出しようとする研究動向が生じた。それは従来の研究方法の反省の上に立ち、戦後、特異な展開をとげてきた日本企業の経営の特徴と、その特徴が培われた歴史的経過とを探ろうとする欲求に応じるものである。このような動向の中で、日本財閥史のすぐれた研究者である本学商学部の安岡重明教授が、門下の石川健次郎氏(商学部助教授、千本曉子氏(商学研究科博士課程後期))とともに刊行されたのが本書である。

編者の安岡氏は「はしがき」で「本書の新味は、企業形態の展開、所有者の性格と

経営者の関係、経営戦略の継承の問題などに、とくに関心を払った点や、労務管理史を整理した点にあるだろう」と述べているが、これらの諸点を踏まえて、江戸時代初期以降、一九六〇年代に至る三井の経営の展開を克明に跡付けている。本書の構成は第一章三井財閥の特色と研究史 第二章江戸時代の家業と組織 第三章転換期の諸方策 第四章財閥への道程 第五章三井合名会社の設立 第六章三井コンツェルンの展開 第七章戦時体制と三井財閥の停滞 第八章財閥解体と企業集団の生成、参考文献、索引である。

本書の特色としてあげられた企業の所有者と経営者との関係を軸に読むと、明治初年の大番頭三野村利左衛門から、鉱業化を進めた益田孝、工業化を進めた中上川彦次郎、そのあとの団琢磨、池田成彬へと継承される三井の経営には、各々特徴があつて興味尽きない。これら大番頭格の経営者と三井家との関係は、家憲の制定や、三井家事業と三井家同族の株の所有形態に具体的に表現されているが、この点の叙述は詳細をきわめている。

ところで安岡氏によると、財閥とは「家族または同族によつて、出資された親会社（持株会社）が中核となり、親会社が支配している諸企業（子会社）に多種の産業を経営させている企業集団であつて、大規模な子会社はそれぞれの産業部門において寡占的な地位を占める」のであるが、経営の視点を強く打ち出したこの規定には、財閥と国家との関係の視点が落ちているようである。本書の叙述にも、三井財閥が戦争の度ごとに発展をとげ、経営を多角化していく過程が丹念に記述されている。三井家の経営のからくりに加えて、今後は国家の財閥庇護と統制のからくり、をもぜひ分析していただきたい。

「組織の三菱」「結集の住友」に対し「人の三井」といわれながら、結束力が弱く、前二者に追い越された三井財閥の経営のあり方を、史的に追究した本書の功績は高く評価され、日本財閥史研究の推進役を果たすことは間違いない。

仲村 研（大学人文科学研究所教授）

大谷 實・斎藤正治著

『犯罪被害給付制度』

（有斐閣 新書判）
二四四頁 六五〇円

犯罪に関する事件がマスコミで報道されない日はない。なかでも通り魔事件に代表される無差別の殺人事件はあとをたたず、事件の起こるたびに犯人に対する社会の怒りと関心を呼んでいる。しかし、その際、被害者や遺族はどのような状態におかれているのだろうか。この点については、社会の関心は必ずしも大きくないが、被害者および遺族の多くは精神的苦痛と財産的損失をこうむり、人生の歯車を大きく狂わされているのが実情である。また、昭和五十一年に法務省と警察庁が行った調査によれば、殺人と傷害致死の場合、遺族世帯総数の約六七％が犯人側からの救済を一切うけておらず、しかも公的な救済もほとんど役に立っていないことが判明した。

このような犯罪被害者および遺族の悲惨な実態を放置してよいのだろうか。何らかの法的救済方法はないのだろうか。これらの問題意識のもとに、犯罪被害者に対する

救済制度創設の必要性を強力に主張して立法化運動を組織したのは、本書の著者である大谷教授であった。教授は、イギリス留学の成果とわが国の被害者の実態調査を踏まえて犯罪被害者補償法の導入を提唱するとともに、「被害者補償を促進する会」を組織し、国家補償を求めて積極的な運動を展開した。この間の経緯についてはすでに『衝動殺人——息子』(木下恵介監督)のタイトルで映画化されたところである。そして、この立法化運動は、昭和五年四月の第九一回国会における「犯罪被害者等給付金支給法」(昭和五十六年一月施行)の成立によって実を結ぶに至るのである。

一人の法律家の提案が、社会的な運動を喚起し立法化に成功した例は極めて稀である。しかも、その提案が伝統的な法律論・法制度の枠を超えた大胆なものであり、当初、学会および実務界の反応もそれほど好意的なものではなかっただけに、多くの注目すべき論作を次々と発表し立法化にこぎつけた教授の情熱と努力はなみなみならぬものであったといえよう。

本書は、この画期的な新法を正確に把握

することを目的として書かれたものであり、斎藤正治氏(警察庁警務局犯罪被害給付室長)の共著をえて、最初の本格的な注釈書となっている。施行後二年にわたない犯罪被害者救済制度はなお揺籃期にあり、新法の着実な成長・展開は多くの人々の切望するところである。実務家のみならず一般読者を対象として平易に描かれた本書によって、一人でも多くの人が新法への理解を深め、犯罪被害者への救済が一層発展してゆくことを心から祈りたい。

瀬川 晃 (大学法学部助教授)

同志社大学人文科学研究所編

『和装織物業の研究』

(ミネルヴァ書房 七、〇〇〇円)
(五〇五頁)

本書は、同志社大学人文科学研究所の研究部門のひとつとして、一九七七年〜一九七九年の三年にわたって設けられた「日本経済における地場産業問題」(代表者前川恭一・同大教授)の研究成果が集大成されたものである。

本書の研究対象が、その書名の示すよう

に和装織物業におかれたのは、さい近、地方主義や地域経済とのかかわりにおいて、また中小零細企業研究の新しいジャンルとしてもとりあげられている地場産業問題の問題性が、和装織物業においてもっとも集中的に表現されていると考えられたことと、研究部門のメンバーの多くの人達が和装織物業の個別産地等の調査研究に多くの業績を残されており、人文科学研究所を中心として行われてきた京都における伝統産業に関する共同研究を継承・発展させることを意図されたことにある。

地場産業問題が本格的展開をみせたのは、七〇年代に入ってからのものであるが、第二次大戦後とくに高度成長過程のなかで蓄積され矛盾によるものであり、中小零細企業の問題がたんなる個別企業問題としてではなく、産地ぐるみ、業種ぐるみの問題として、地域的ひろがりをもつてとらえられなければならないようになってきたことによるとされている。そしてその展開過程を第一期(一九四五〜五四年)、第二期(一九五五〜六九年)、第三期(一九七〇年以降)の三期に分け、各時期において地場産業を規定

する特徴的要因の解明が試みられるとともに、それとのかかわりにおいてそれぞれ固有の歴史をもち全国にわたって立地する個別産地を比較分析することによって、その類型化や個別産地の全国的な位置づけが試みられているところに本書の大きな特色がある。

また、さい近、ますます顕著化しつつある「きもの離れ」に象徴される和装織物業問題は、単なる産地レベルの問題として片づけられるのではなく、和装織物の生産、流通、消費を含むより高いレベルでとらえられなければならないと思うが、本書では、和装織物の消費動向や流通構造にも多くの紙面がさかれていることもその大きな特色に加えられる。

本書の構成は五編からなる。第一編の和装織物業の研究視角では、「地場産業問題の展開と和装織物業地」(前川恭一)「和装織物業の産地形式と産地構造の変化」(笹田友三郎・同大教授)「和装織物業における人的生産要素の展開」(古米淑郎・同大教授、第二編の和装織物業の類型的把握では、「全国フィラメント織物業地の主要生産動

向」(前川恭一・吉田敬一・京都自治総合研究所)「フィラメント織物業地の諸類型とその特質」(前川恭一)「ステープル織物業地の諸類型とその特質」(太田進一・同大助教授)、第三編の和装織物業の産地構造分析では、研究会メンバー以外の三氏の執筆論文が加えられており、「西陣織物業の産地構造分析」(以下産地構造分析をさぶく)(笹田友三郎・吉田敬一)「関東先染織物業の……」(関 満博・東京都商工指導所)「和装白生地産地の諸類型とその特質」(二場邦彦・立命大教授)「大島紬織物業の……」(児島正男・鹿児島県立短大教授)「沖縄織物業の……」(窪田哲三郎・同志社女子中高教諭)、第四編の和装染色加工業の産地構造分析(中村宏治・同大助教授)では「和装染色加工業の特質と構造」、「京染友禅業の産地構造分析」、「十日町染織業の産地構造分析」、そして第五編の和装染織製品の需給動向と流通構造(柿野敦吾・名古屋学院大助教授)では、「和装染織製品の需要・供給構造」、「和装染織主要産地の構造と出荷状況」、「和装染織製品流通業の構造と流通状況」、「和装染織製品流通構造のモデル的

把握と問題点」となっている。

以上によっても明らかなように、本書によって名実ともに地場産業の代表のひとつであり、きわめて複雑な構造をもつ和装織物業の鳥瞰図が与えられるとともに、現在それがおかれている内外の厳しい環境と問題について多くを学びとることができる。方法論的立場を異にする人達の共同研究による困難はあると思われるが、今日その存立を問われる和装織物業について、地場産業の立場からする問題解決への方向についての示唆が、今後なんらかの形で与えられることを望んでいる人は少なくないと思う。

なお、細部にわたるが、大島紬織物業の分析において、そこで利用された原資料や参照文献の明示のないものがいくつかみられた。その中には、異った調査方法による統計数字の比較がなされているところもある。この点、本書をもとに研究を深めていく上で問題を残している。

出石邦保 (大学商学部教授)

荻野恕三郎著

『古代日本の遊びの研究』

(南窓社 六五〇〇円)
三四四頁

カント哲学の研究から入って、生と死の問題を追求し、更にこれを超克する、「遊び」の哲学的・文化的意味について、多年精緻な考察を進めていられた異友荻野教授が、いよいよその本格的・実証的な展開を、日本古代の遊びの問題について、行なったのが、本書である。

これはもともと『同志社女子大学学術研究年報』その他に、数年にわたって書き継がれていたものを、終章の結論を加え、多少の補正を加えて、一貫させた形としたものであるが、従来この方面の研究としては、最もよくまとまり、また専門の哲学・思想的な分野と共に、神話学、宗教学、民俗学、歴史学などの色々な分野からの研究をも、広く応用した、最も総合的・実証的・体系的な研究と言える。

ここで扱う「遊び」の分析は、単なる遊戯衝動やその行為の、生物学的でない心理学的な追求ではない。『記紀』『万葉』など

の古典伝承に表われた「遊び」の概念を、その基底をなす古代的・神話的な世界像に結びつけ、あわせて日本文化の本質や源流にまで触れた、文化史・思想史的な「遊び」の研究である。

人間の「遊び」の心意を神話や祭式とに関連させ、人間の文化の本質の分析を行う研究は、ホイジンガ、カイヨアなど、欧米の学者が行なっているが、また日本では人類学者の山口昌男氏などの研究があるが、こうした従来の研究を踏まえつつ、直接に日本古代の「遊び」の意味と機能を、これほど体系的に、まとめた書は、まだ他に聞かない。これは、一つの日本古代の世界観であり、文化の本質学であると言ってよい。

著者は、まず創世神話に見える「魚の遊び」から説きおこし、天宇受売の神遊び、大國主火中出生の遊び、天若日子の喪屋の遊び、事代主の鳥の遊びなどから、天孫降臨、海宮遊幸、神武の高佐土野遊行、本牟智和氣の水の遊び、日本武の遊行、その他幾多の、古代的な「遊び」「遊行」は、単なる遊戯ではなく、散歩でもなく、それら

は一つ一つみな祭式的なものであり、何れもそれらは、宇宙をコスモス（秩序世界）から一旦脱離し、原古のカオス（渾沌世界）に回帰させ、その新しい生気を盛りあげようとする行為であり、究竟是宇宙の周期性のリズムに合致させようとする行為であるとして、宇宙論的視角からながめようとするのである。そうして、ここに、古代の王権祭式や豊饒祭式、成人式などの密接な関連を見出そうとするのである。著者の考えでは、こうした古代的な「遊び」は、宇宙創造のときの神わざを原型・祖型とした、それへの復帰・反復、再現の行為である。古代人は、遊びにおいて宇宙を体験し、この宇宙の生と死のリズムを自らに行じたのであるという。

こうした著者の思想の根底には、ファン・デル・レーウや、M・エリアーデらの「永遠なる回帰」の思想が、中核となっていることは、疑いの余地はないが、然し、これが日本の神話世界を舞台とした、みごとな日本の結実をなしているのである。是非一読をおすすめしたい。

松前健（同志社大学非常勤講師・立命館大学教授）

榊原胖夫・篠原総一・馬場浩也著

『アメリカ経済をみる眼』

(有斐閣 新書判)
二二二頁 六〇〇円

本書は日米間の経済摩擦が複雑化しつつある今日、アメリカ経済に関するスタンダードな知識を提供するために編まれた概説書である。

著書代表の榊原氏が冒頭で指摘されているように、戦後の日本人にとってアメリカは余りにも身近な存在でありつづけてきたために、アメリカについて知っているとはいこんでいることと、知っていなければならぬこととの間に混同が生じ、これが日本側からの誤解の種になることが多い。とくに経済学徒は、テキストや留学を通してアメリカ製の経済学になじんできたため、この種の錯覚に陥りがちである。だが、経済理論を知っていてもアメリカ経済を知ったことにはならない。アメリカ経済の理解のためにはアメリカ固有の環境（ミリュール）というか、歴史的制度的知識を必要とする。これが本書を貫いて流れるライトモチーフであり、すぐれた概説書にしている

所以である。

第一章「アメリカ経済をみる眼」では、アメリカ人という特異な構成をもつ国民によってきり拓かれたアメリカ独自の国家のなりたち、歴史的制度的枠組、価値観などが丁寧に解説されている。すぐれた経済学者であると同時に、わが国有数のアメリカ研究家でもある榊原氏の蘊蓄が傾けられており、軽快な筆致にもかかわらず、内容的に重みを感じさせずにはおかない。

各論にあたる第二章と第三章は、滞米経験豊富な二人の気鋭の研究者によってそれぞれ得意の分野が担当されている。

篠原氏による第二章「世界のなかのアメリカ」では、世界経済のなかでのアメリカの役割とその変遷を辿りつつ、自由貿易体制から保護主義の抬頭、そして今日の貿易摩擦を招来した論理と過程が明快に説明されている。篠原氏自身のしっかりした理論を踏まえているだけに読みごたえがあり、日米貿易摩擦の理論のための絶好の入門書になっている。

馬場氏による第三章「自由と平等のシレンマ」は、独立宣言にうたわれた自由と平

等の権利を、建国いらいマイノリティを抱えたこの国において真に万民のものとするための苦悩と余曲折の歴史的過程を鮮明に描きだし、経済的社会的弱者の側にたつりベール派の立場から、現政権の政策が批判的に分析されている。

このように、本書は類書のないすぐれたアメリカ経済社会の入門書といえるが、あえて欲をいうなら、消長の激しいアメリカ産業を地域との関連で論じた章があれば、さらに魅力的な概説書となったであろう。第二版を期待して出版社への注文としておこう。

野間俊威（大学経済学部教授）